

Special Exhibition

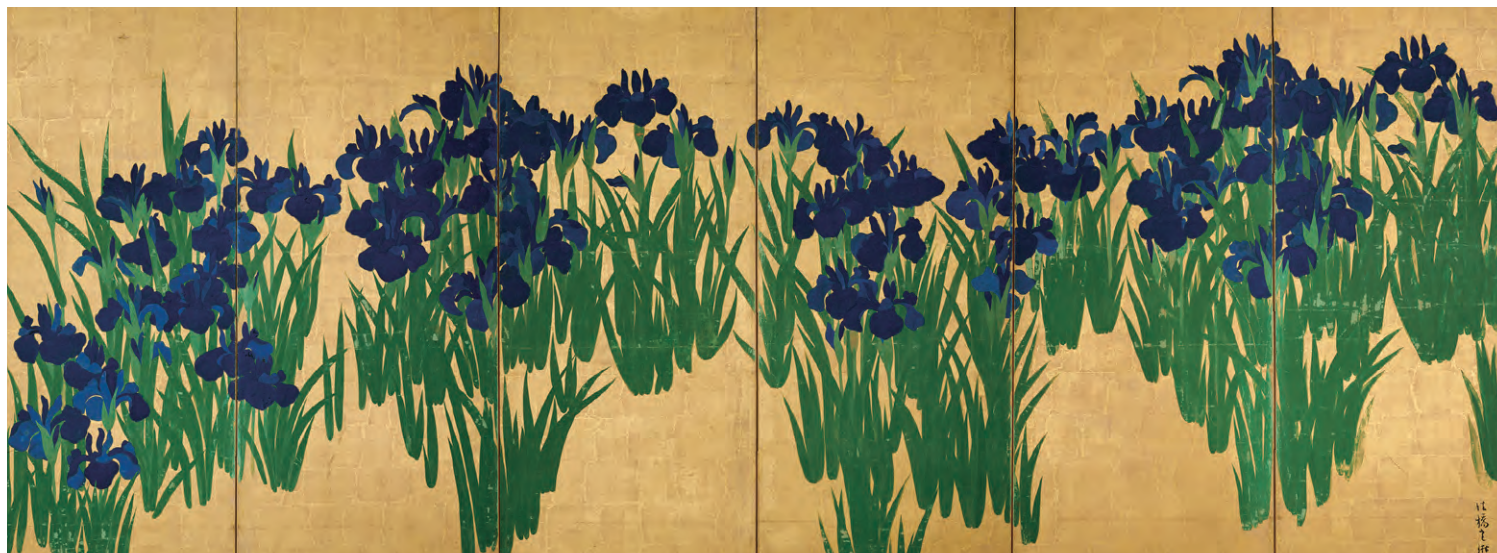
# Irises Screens: The Age of Kōrin, 1658-1716



特別展

か き つ ば た ず

# 国宝・燕子花図屏風



## 光琳の生きた時代 1658-1716



この展覧会は、「燕子花図屏風」を中心に、光琳がこの世に生きた期間に制作された作品で構成するものです。始まりは、幕府御用絵師・狩野探幽の「両帝図屏風」（1661年）や、宮廷絵所への復帰を果たした土佐光起の「源氏物語図」など伝統的な画派の作品。また、江戸初期の上層町衆の美意識を伝える父・宗謙の和歌巻や、琳派の礎を築いた俵屋宗達の後継者である喜多川相説の清新な草花図を経て、光琳の金屏風の数々をご覧ください。さらに、弟・乾山の陶芸作品への絵付けを契機として光琳の弟子となり、写実性と装飾性を兼ね備えた画家・渡辺始興や、1714年に制作された、まるで室町時代の詩画軸のような作品（「物外和尚送別図」）などによって、この時期の美術が内包する様々な可能性をご紹介します。そして最後は、元禄年間の京都からのお伊勢参りの様子を描いた「伊勢参宮道中図屏風」を展示、時代の息吹を感じていただきます。

約60年の美術の歴史を切り取って、その多彩で魅力的な様相をご覧ください。

尾形光琳（1658～1716）といえは、町人が担い手となって花開いた元禄（1688～1704）文化の立役者のイメージがあるでしょう。そして、そのイメージの中心に位置するのが、光琳40歳代半ばの代表作「燕子花図屏風」です。しかし、視点をより高い位置において見ると、その前半生は、宮廷や幕府によって主導された近世前期の文化芸術のただ中であり、また後半生は、円山応挙や伊藤若冲など民間出身の個性派が活躍した18世紀後半の京都画壇を準備したと見ることもできます。

2023年 4月15日(土) - 5月14日(日)

日時指定予約制

根津美術館 NEZU MUSEUM <https://www.nezu-muse.or.jp>

根津美術館  
NEZUMUSEUM





国宝 燕子花図屏風  
尾形光琳筆  
6曲1双 紙本金地着色  
日本・江戸時代 18世紀



総金地に、高品質な絵具をふんだんに用いて描かれた燕子花の群生が、はつらつとした生気を放つ。左右隻の対照的な構図のバランスも素晴らしい。画家としてのスタートが遅かった光琳が到達した最初の芸術的頂点である。

光琳も絵の基本は狩野派に学んだ



両帝図屏風  
狩野探幽筆  
6曲1双 紙本金地着色  
日本・江戸時代 寛文元年(1661)



光琳が京都の高級呉服商の家に生まれて間もない頃、幕府御用絵師・狩野探幽(1602~74)が描いた作品。為政者が模範とすべき古代中国の伝説的な皇帝を主題とする。時に探幽60歳、この年から落款に年齢を書き入れ始めた。

光琳の初期の草花図は、この作品と似た画面でした。画面構成に、後の「燕子花図屏風」に通じる部分もあります。

若き光琳を刺激した  
優美な草花図



四季草花図屏風  
喜多川相説筆  
6曲1双 紙本着色  
日本・江戸時代 17世紀



墨を多用した瀟洒でかつ斬新な画面である。喜多川相説(生没年不詳)は、宗達が主宰した工房・俵屋の3代目。画家を志した光琳が最初に活躍の場を求めた宮廷周辺では、このような草花図が流行していた。

活気あふれる  
元禄のお伊勢参り



伊勢参宮道中図屏風  
6曲1双 紙本金地着色  
日本・江戸時代 17~18世紀



京都からのお伊勢参りの旅の様子を描いた屏風。道中の名所や、そこで繰り広げられるさまざまな風俗の描写に見どころがある。画中の建築物から元禄年間頃、まさに光琳の生きた時代の息吹を伝える。

生家に息づいていた  
貴族文化



しんこきん わかしゅうしょう  
新古今和歌集抄 (部分)  
尾形宗謙筆  
1巻 彩絹墨書  
日本・江戸時代 寛文12年(1672)

木々や草花などの繊細な下絵をほどこした絹地に『新古今和歌集』を抜き書きするのは光琳の父・尾形宗謙(1621~87)。宗謙は呉服商雁金屋の当主として家業に勤しむかたわら、江戸初期の芸術家・本阿弥光悦の書風に長じた。

光琳の弟子である渡辺始興は、円山応挙が「名手」と認めた画家。琳派と写生派を結ぶキーパーソンです。  
本展では、始興が素信と名乗り絵付けをした乾山のやきものも展示します。

光琳画に芽生える  
写生的表現



なつくさむすびしょうぶ  
夏草図屏風  
おがたこうりん  
尾形光琳筆  
2曲1双 紙本金地着色  
日本・江戸時代 18世紀

華麗な装飾性と共に写実性を備えた作品。光琳の弟子で、かつ公家の近衛家熙に仕えて草花写生を学んだ渡辺始興のサポートを想像させる。

本格デビューの  
大津絵屏風



おおつ え はりまぜびょうぶ  
大津絵貼交屏風  
6曲1隻 紙本着色  
日本・江戸時代 18世紀

大津絵は、京都と大津を結ぶ街道で人気の土産物でした。「伊勢参宮道中図屏風」(前ページ下段)の右隻部分(↓)は、大津絵の制作と販売、そして享受の様子を描いた、現存最古のビジュアル・イメージです。

18世紀の初め頃、大津絵の歴史では早い時期の作品。庶民的な絵画にふさわしい簡素な屏風に仕立てられているのも貴重である。2019年パリの大津絵展を経て待望の展示。

そがしょうはく  
曾我蕭白に先駆ける  
アナクロニズム



もつがいおしょうそうべつ ず  
物外和尚送別図  
だいせんすうたつ  
大川崇達ほか賛  
1幅 紙本墨画淡彩  
日本・江戸時代 正徳4年(1714)

南禅寺に在籍した物外本超が、江戸に帰郷する際の餞として制作された作品。大勢の禅僧たちによる漢詩が富士を描いた絵を圧倒し、まるで室町時代の詩画軸のようだ。室町回帰は、18世紀前半の京都におけるトレンドでもあった。



【展示室5】西田コレクション受贈記念Ⅱ からの 唐物

当館顧問・西田宏子より陶磁器など工芸品 169 件を受贈。その中の優品を 3 回に分けてお披露目するシリーズの第 2 回は、中国の陶磁器と漆器です。



せいかにんぶつもんひつどう  
青花人物文筆筒  
けいとくちん  
景德鎮窯  
1 口  
中国・清時代 17 世紀  
西田宏子寄贈

柳の下で草を食む 1 頭の驢馬ろばと、その驢馬を見つめる人物が描かれた中国・景德鎮窯の筆筒。ヨーロッパ向けの輸出品のうちでは精緻な筆致が珍しい優品。

【展示室6】初夏の茶の湯

立夏りっか（5月6日）を迎えると、暦のうえでは夏が始まります。初夏の清々しい気候に合わせ、軽やかな茶道具約 20 件を取り合わせます。



さほりつりふねはないれ ひらた  
砂張釣舟花入 銘 鐺  
1 枚 響銅  
東南アジア 15 世紀

舟形の花入は、床の天井から鎖で吊るして飾ることから釣舟と称される。水が想起され、また風で揺れる様子が涼しげであることから、夏に好まれる。

【展示室3】仏教美術の魅力—中国と朝鮮の小金銅仏—

銅を用いて造られた小型の金銅仏は、仏教の伝播に伴い盛んに造像されました。この度は、中国と朝鮮の小金銅仏 5 件をご覧ください。



ごそんぶつぞう  
五尊仏像  
1 面 銅造鎚鏤鍍金  
中国・唐時代 7 世紀

※本リリースに掲載されている作品はすべて根津美術館の所蔵品です。

その他の情報

夜間開館

5月9日（火）から  
5月14日（日）は  
午後7時まで開館。  
（入館は閉館30分前まで）



庭園のカキツバタ

作品の鑑賞とともに、カキツバタの咲く庭園の散策もお楽しみください。  
（例年4月下旬から5月上旬にかけて開花します。）

※最新状況、追加の催事については、当館ウェブサイトでご案内いたします。

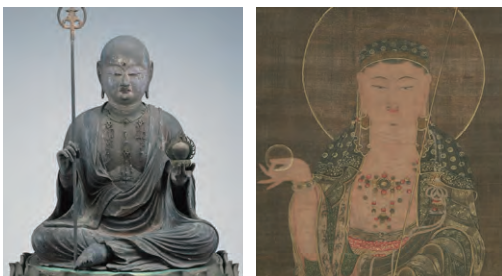
## 開催概要

- 展覧会名 特別展「国宝・燕子花図屏風—光琳の生きた時代 1658-1716—」  
日時指定予約制 かきつばた ずびょうぶ ご来館前に当館ホームページでの日時指定入館券の購入にご協力ください。  
(招待はがきをお持ちで入館無料の方も予約が必要です。)
- 主催 根津美術館
- 開催期間 2023年4月15日〔土〕～5月14日〔日〕
- 開館時間 午前10時～午後5時  
ただし、5月9日〔火〕から5月14日〔日〕は午後7時まで開館。(入館はいずれも閉館30分前まで)
- 休館日 5月1日を除く毎週月曜日
- 入館料 オンライン日時指定予約 一般 1500円(1300円) 学生 1200円(1000円)  
・( )内は障害者手帳提示者及び同伴者1名の料金。中学生以下は無料。  
・当日券(一般1600円)も販売しております。  
(ご予約の方を優先してご案内いたしますので、当日券の方は少々お待ちいただくことがあります。  
混雑状況によっては当日券を販売しないことがあります。)  
・2023年4月11日〔火〕より当館ホームページで予約を受け付けます。  
・ご予約は1グループ10名までとさせていただきます。
- アクセス 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線〈表参道〉駅下車A5出口(階段)より徒歩8分、  
B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベータまたはエスカレーター)より徒歩10分
- 住所 〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1
- お問合せ Tel. 03-3400-2536(代表)  
website <https://www.nezu-muse.or.jp>
- 広報・取材のお問合せ 学芸部広報課 所/村岡  
Tel. 03-3400-2538(直通) e-mail: [press@nezu-muse.or.jp](mailto:press@nezu-muse.or.jp)

当館の広報制作物に関して、郵送からメール配信への切り替えをご希望の方は、根津美術館 広報課へ  
どうぞお知らせください。(press@nezu-muse.or.jp)

## 次回展

企画展「救いのみほとけ—お地蔵さまの美術—」  
2023年5月27日(土)～7月2日(日)



日本でもっとも親しまれてきたほとけである地蔵菩薩。館蔵の  
仏画や仏像を中心に、地蔵にかかわる様々な作品を紹介します。

左: 地蔵菩薩坐像 日本・鎌倉時代 13世紀  
右: 地蔵菩薩像 朝鮮・高麗時代 14世紀  
いずれも根津美術館蔵

\*本資料掲載の内容は、予告なく変更になる場合がございます。最新の情報は当館広報課へお問い合わせください。(2023.1.)